

熊本で「墓穴」を掘ってきた?!

発掘新聞

4月16日号

平成30年度第1号

編集・発行

九州歴史資料館

電話 0942-75-9575

熊本で復興調査継続中。 本館派遣職員も奔走中。



御船町小坂大塚古墳全景（後方は地域の霊山である飯田山）

平成28年4月の熊本地震を受けて、当館の職員が昨年度より熊本県文化課に派遣され、災害復興関連等の発掘調査に従事している。上半期の内容として、本紙29年度1号で宇土市轟泉水道の調査についてお伝えした。下半期には派遣職員が交代し、主に御船町所在の小坂大塚古墳と宇城市所在の大塚台地遺跡の調査に他県からの派遣職員とともに従事した。



宇城市大塚台地遺跡全景

1000㎡程度の調査面積の多くを小坂大塚古墳の周溝が占め、古墳の直径が54mという、熊本県内でも有数の大型円墳と判明した。周溝は、削平により消失した上部を復元して考えると、幅10m、深さ2.5mもの規模になる。また、葬送の際に外部から古墳内部の石室への通り道として周溝が途切れる「陸橋」も見つかった。

古墳の実態は、地上の痕跡と大きくかけ離れていた、そんな実例と言える調査成果であった。なお、周溝出土の壺形埴輪等での古墳時代中期初め頃とした年代観は、以前と符合している。



大塚台地遺跡 石枕のある粘土床墓

大塚台地遺跡は、災害公営住宅建設に先だつて調査され、床や壁に粘土を使う「粘土床墓」が30基見つかった。この様な墓は、これまでわずかな例しかなく、また出土は初。他にも周溝墓の溝、墓地の区画溝、小児甕棺墓等が発見され、ともに弥生時代の終わり頃と考えられる。

粘土床墓は、密集して切り合うものもあり、周溝墓は有力者の墓とみられるが、中心部は残念ながら以前の開発で消失していた。

大塚台地遺跡は、その重要性から、建物の設計変更で保存された。開発と文化財保護の両立をもって、復興関連調査は今後も継続される。(坂元記者)